

説教 『杯=恵みの器、罪の器』山本護 牧師
聖書 詩編16:5/ルカ福音書22:39~46

「イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた(ルカ22:40)」。この時の「誘惑」は、苦しみであり(22:44)、悲しみ(22:45)なのだろう。それらが祈りを妨げ、中断させ、眠らせてしまう。イエスは眠りこけた弟子に、「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい(22:46)」と再度戒めた。そして結局、この言葉が、弟子たちに語るイエス最後の教えとなった。

十字架が間近に迫る危うい中で眠れるとは、弟子たちは肝が据わっているのか、無神経なのか。もちろん違う。「誘惑に陥る(22:40)」とは、目をつむって己が使命から逃げ出すこと。それを「眠る」と表現した。思い巡らせると、弟子たちへの言葉は、イエスが自らにむけて放つ響きに聞こえて来る。

「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけください(22:42a)」と、イエスはひざまずき、必死に祈った(22:41)。しかし祈ることで、殺される使命から逃げたい気持ちを収め、「わたしの願いではなく、御心のままに行なってください(22:42b)」と不条理な御心を受け入れる。まことに迫力のある祈り。葛藤であり、混乱であり、神の御心が人間として実際に在ることの、もの凄く緊張である。

イエスは弟子たちに「祈りなさい」と命じると、「自分は、石を投げて届くほどの所に離れて(22:41)」祈った。「石を投げて届くほど」とは、なんとも絶妙な距離だが、どういう意味なのか。祈りの声は聞き取れないが、「苦しみもだえる(22:44)」様子は窺われる。十字架を受け入れようとされるイエスの迷いは分からなくとも、その苦しみは感じられる位置で、弟子たちも祈っていた。ところが祈りは続かず、「悲しみの果てに眠り込んでしまった(22:45)」。弟子たちは、周囲の不穏な空気と、イエスの苦しみを感じた。だが「杯(22:42)」の内実を知ったならば、とても持ち堪えられなかっただろう。

弟子のように私たちも、イエスの求めに応え得ない。戒めを聞き、そのつもりで祈るが、「眠りこけてしまう(22:45)」。そうであってもキリストは、私たちに幻滅したり、諦めて手放したりはしない。私たちを根源的に赦して救う「杯=十字架」を、激しい葛藤の末に、たった一人で負われることになる(22:42)。それにしても十字架を暗示している「杯」とは何であろうか。そこに何を注ぎ入れるのか。

「主はわたしに与えられた分、わたしの杯。主はわたしの運命を支える方(詩編16:5)」。「杯」は、恵みを受ける器として表現される。だが必ずしも恵みに限らない。「逆らう者に災いの火を降らせ、熱風を送り、燃える硫黄をその杯に注がれる(11:6)」。こうして罪の器として語られる場合もある。神がイエスに与えた「杯」は、「人間の罪」を負うための裁きであろうか。いや「恵みの杯」でもあった。

イエスは恵みと罪「二つの杯」を受けた。そして人々には「恵みの杯」を与え、御自分では「罪の杯」を負われた。本来なら、不従順な私たちが負うべき「災いの火や燃える硫黄(11:6)」をイエスが肩代わりされた。そして「主はわたしに与えられた分、わたしの杯(16:5)」という御自分への恵みを、私たちにお与え下さった。だが甘やかされているわけではない。私たちには「石を投げて届くほどの所」で、イエスの苦しみを感じる距離で、目を覚まして祈り続けることが求められている(ルカ22:46)。



【おまけのひとこと】

神の気まぐれに見える一人ひとりの命運 一つひとつのことが御計画の成就に思えることもある
ぼんやりと感ずる己が生涯の中心 薄明の内に十字架の影が 陽炎のごとく いつもゆらめいている